

尾道市教育委員会 令和2年度完了報告書

1. 調査研究概要

本実践地域は1中学校・3小学校で構成されており、これまでの小中連携の経験を生かし、中学校区として目指す資質・能力の育成に向けてカリキュラム・マネジメントに取り組んだ。「しまっ子志プロジェクト全体構想図」を作成し、中学校区で組織的・計画的に生徒指導や教科指導に係る取組を進めてきた。また、育成を目指す資質・能力の小中9年間の系統表を作成し、目指す姿を教職員間で共有し、具体的な取組を行うことができるようにした。各校のテーマの成果と課題を検証し、学校教育目標を実現するためや学習の基盤となる資質・能力、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のための一連のカリキュラム・マネジメントの取組は、市内外に発信できるものとする。

(実践地域における年間実施スケジュール)

月	取組内容
5月	第1回カリキュラム・マネジメント推進委員会(今年度の研究の概要及び計画、総合的な学習の時間の小中全体計画を作成する)
6月	カリキュラム・マネジメント検討会議(4校訪問)
7月	第2回カリキュラム・マネジメント推進委員会 各校で1学期の取組の評価・分析・改善を行う。
8月	カリキュラム・マネジメント検討会議(1学期の評価・分析・改善、「カリキュラム・マネジメントに係る手引き」作成に向けた計画等)を実施する。 第3回カリキュラム・マネジメント推進委員会(G Suiteを活用した授業の在り方、4校の連携方法について検討する。)
11月	第4回カリキュラム・マネジメント推進委員会(「カリキュラム・マネジメントに係る手引き」作成に向けた計画等)
12月	各校で2学期の取組の評価・分析・改善を行う。
1月	第5回カリキュラム・マネジメント推進委員会(「カリキュラム・マネジメントに係る手引き」作成に向けた計画等)
2月	各校で取組の評価・分析・改善を行う。 第6回カリキュラム・マネジメント推進委員会(「カリキュラム・マネジメントに係る手引き」作成に向けた計画等)
3月	まとめ カリキュラム・マネジメントに係る手引き完成 委託事業完了報告書等の提出

2. 調査研究の内容

実践校【向島中学校】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

(2) 調査研究の内容

- ・総合的な学習の時間を軸とした9年間の系統的なカリキュラムを作成する。
- ・資質・能力の具体的な姿を各校で共有するとともに、総合的な学習の時間における生徒の姿を具体化し、学年ごとに単元単位での育成を目指す資質・能力を身に付けた生徒の姿を考える。
- ・次年度シラバスの作成に向けて、各校のシラバスの交流を行い、各校の学習内容の系統性を整理し、小学校での学習内容と中学校での学習内容の関連性を強化することで系統的な学習の充実を図る。
- ・次年度のカリキュラム・マネジメント推進委員会で、系統的なカリキュラムの検証や評価の方法について検討する。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

【成果】

- ・4月当初に育成を目指す資質・能力を身につけた生徒の姿を共有したことで、全教職員が共通認識をもって取組を考えることができた。
- ・向島中学校区9年間の総合的な学習の時間の系統性を整理したことで、1年生で小学校での学びを中学校の学びへと広げる新しい単元を開発することができた。
- ・向島中学校区で統一した向島スタンダードを活用した授業づくりを行うことで、相手を意識した発表を工夫する生徒の割合が増加した。

【課題】

- ・小中間や学年を超えて、児童生徒の学びを発表する場面を設定するなど中学校区として中学生の資質・能力を身につけた生徒の姿を見せるなどすることで、児童生徒に具体的なゴールイメージを共有することが必要である。
- ・9年間の資質・能力の評価について9年間で児童生徒に到達してほしい具体的な姿のルーブリックを作成するなど評価を充実する必要がある。

【改善方策】

- ・向島中学校として育成を目指す資質・能力を統一し、具体的な姿や作品の到達目標を定めたルーブリック評価表を作成し、すべての職員で共有化することで9年間の系統性のある指導を行う。
- ・生徒の実態を踏まえて資質・能力の見直しを行うとともに、PDCAサイクルのC（チェック⇒アクション）の部分の充実を図ることが必要である。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
5月	第1回カリキュラム・マネジメント推進委員会(今年度の研究の概要及び計画、総合的な学習の時間の小中全体計画を作成する)
6月	校内授業研究会・研究協議
7月	第2回カリキュラム・マネジメント推進委員会
8月	カリキュラム・マネジメント検討会議 第3回カリキュラム・マネジメント推進委員会 校内授業研究会・研究協議
11月	第4回カリキュラム・マネジメント推進委員会 校内授業研究会
1月	第5回カリキュラム・マネジメント推進委員会 校内授業研究会
2月	第6回カリキュラム・マネジメント推進委員会 校内授業研究会
3月	まとめ

実践校【高見小学校】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等(目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など)の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

(2) 調査研究の内容

- ・言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等を高め、学びの主体者を育てるために、各教科等(理科、生活科、総合的な学習の時間)や他の教育活動に横断的な視点を取り入れた指導計画を作成する。
- ・研修の実施、研修会等への参加によって教職員のスキルアップを目指す。
- ・校内のミニ研修を増やす。(短時間でPDCAサイクルをまわす)
- ・理科・生活科を中心に、資質・能力(学習の基盤となる)を視점에置いた指導計画を作成し、授業改善を進める。
- ・指導計画をもとに理科・生活科中心に授業研究を行うことで、児童の主体的で対話的な深い学びの実現に向けて取り組む。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

【成果】

- ・学習の基盤となる資質・能力については、児童実態をもとに課題を挙げ、育てたい力を具体的に設定した。それをもとにした具体的計画・実施により、児童の見取り

を細やかにを行い、付けたい力を高めることができた。

- ・教職員が学校教育活動全体を見渡して、教科等横断的に教育内容を捉え、関連付けながら指導を行ったことにより、児童も他教科や生活と学習をつなげるという視点（カリキュラム・マネジメント）が育ってきた。
- ・学年で付けたい力を明確にしたことで、前学年までに付けておくべき力、その学年で付けておく力、次学年につながる力が明確になり、育てたい資質・能力を系統的に見据えて指導することができた。

【課題】

- ・校内研修を大きなPDCAサイクルで回していくことができなかつたことで、校内研修で学んだことが以後の指導に十分生かされていなかった。研修での学びの視点を「見える化」し、教職員全体で共有化を図り、日々の取組につなげていくことが不十分であった。

【改善方策】

- ・「知識・技能」の定着が不十分な点については、一つ一つの事柄を確実に押さえながらその後の定着の確認を丁寧に行っていく必要がある。また、繰り返し学習による定着が難しい児童に対する個別実態（授業設計評価マトリクスレベル1）に応じた支援方法を考えていく。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
5月	資質・能力を育成するための授業づくり研修（算数科・道徳）
6月	理科・生活科における教科固有の資質・能力と学習の基盤となる資質・能力と評価について カリキュラム・マネジメントのツールとしての理科カリマネシラバスと指導のその具体について 校内授業研究事前検討会（第5学年 理科）
7月	校内授業研究及び協議会 第5学年 理科「台風と気象情報」
8月	学校評価表に基づく1学期取組の検証 カリマネマップの改善 校内授業研究事前検討会（第1学年 生活科・第4学年 理科）
9月	
10月	全国学力・学習状況調査結果分析・改善策の検討 （学習の基盤となる資質・能力ベース） 授業研究模擬授業 授業研究及び協議会（第1学年 生活科「あきとなかよし」・第4学年 理科「ものの温度と体積」） 校内授業研究事前検討会（第2学年 生活科）
11月	「向島スタンダード」について（成果と課題・具体的改善策） 理科カリマネシラバス改善及び生活科カリマネシラバス作成 校内授業研究及び協議会（第2学年 生活科「つくろう あそぼう くふう

	しょう」
12月	「学びの变革」児童アンケート（第4学年～第6学年）検証
1月	「授業設計評価マトリクス」「理科単元末テスト結果」検証結果のまとめと今後に向けた取組について 手引き書作成
2月	手引き書推敲
3月	研究のまとめ 次年度の研究の方向性について

実践校【向島中央小学校】

（1） 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

（2） 調査研究の内容

- ・学校教育目標の達成や資質・能力の育成に向けて、各教科等（算数科、道徳科、総合的な学習の時間）の教育内容を教科横断的な視点で再組織し、実践、改善する。
- ・新教育課程におけるカリキュラム・マップを再編し、教科横断的な視点で各教科等の見直しを行う。その視点に学校教育目標の実現に向けての視点、資質・能力を育成するという視点を置く。
- ・研究教科として算数科を中心に据え、多面的・批判的にみる力を総合的な学習の時間をはじめ、他の教科等で活用させることを通して、本校の研究主題に迫っていく。
- ・学習集団の基盤、児童個々の学びに向かおうとする力（意欲）を育成していくために、道徳科の授業を基盤に置く。（外部人材の活用も含めて道徳科の授業改善をはかっていく。）
- ・短いスパンで、確実にPDCAのCheckを行い、早く次の一手を繰り出していく。（そのシステムづくり。）

（3） 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

【成果】

- ・学校教育目標を基に、育成を目指す資質・能力を設定し、教職員の共通理解を図ることができた。
- ・学校評価表やカリキュラム・マップの作成、活用を通して、児童の姿から進捗状況や達成度を教職員間で共有し、取組を推進していくことが概ねできた。
- ・研修計画の中に検証の時間を定期的に位置付けたことにより、マネジメントサイクルを回す際に課題であった評価(C)・改善(A)機能の向上につながった。
- ・総合的な学習の時間の研修を充実させたことにより、特に既習事項を「つかう力」を用いた教科横断的な視点での学習への意識が教師に高まり、児童にも浸透してきた。

【課題】

- ・カリキュラム・マップの活用状況に学年間で差が見受けられた。また、学年内のマップ活用にとどまり、6年間の系統や教科の系統、中学校とのつながりを明確に示すまでには至らなかった。
- ・学校教育目標の実現、資質・能力の育成に向けた具体的な目標を、教職員と児童が共有して取り組むための手立てが十分ではなかった。
- ・学校教育目標等の保護者・地域への理解や、人的・物的資源の有効活用が十分ではなかった。

【改善方策】

- ・取り組むべき課題の重点を共有し、学年間や教科間の系統を意識して取組を推進できるように、カリキュラム・マップの再編成を行い、活用していく。
- ・児童自身が、「何を目指して取り組むのか」「付けたい力がどの程度、身に付いたのか」「その要因は何か」等、目標や見通しをもって活動したり振り返ったりする場を設定していく。家庭においても取組の協力や評価を依頼することで、児童の姿を通して教育活動への理解を得られるようにする。
- ・地域人材や地域素材を生かした幅広い教育活動を展開できるように、教育計画への位置付けを行い、活用が図られるように努めていく。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
5月	第1回カリキュラム・マネジメント推進委員会
6月	カリキュラム・マネジメント検討会議（4校訪問） サテライト講座（カリキュラム・マネジメント） ノート実態交流・評価
7月	第2回カリキュラム・マネジメント推進委員会 校内授業研究会・研究協議(特別支援) 1学期の取組の評価・分析・改善
8月	カリキュラム・マネジメント検討会議 第3回カリキュラム・マネジメント推進委員会
9月	校内授業研究会・研究協議(算数科・道徳科)
10月	校内授業研究会・研究協議(算数科・総合的な学習の時間)
11月	第4回カリキュラム・マネジメント推進委員会 校内授業研究会・研究協議(算数科) ノート実態交流・評価
12月	2学期の取組の評価・分析・改善
1月	第5回カリキュラム・マネジメント推進委員会 校内授業研究会・研究協議(算数科・総合的な学習の時間) ノート実態交流・評価
2月	第6回カリキュラム・マネジメント推進委員会
3月	取組の評価、まとめ

実践校【三幸小学校】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

(2) 調査研究の内容

- ・ 言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等を高め、学びの主体者を育てるために、各教科等（算数科、総合的な学習の時間）や他の教育活動に横断的な視点を取り入れた指導計画を作成する。
- ・ 年間指導計画にカリキュラム・マネジメントにより資質・能力をどのように育成していくか学年の系統性も考慮し作成していく。又、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力について意識したカリキュラムになるよう重点単元等位置づけ教科横断的な指導となるようカリキュラムを作成する。
- ・ ルーブリック評価を行事だけではなく、教科に対応したものを学年の系統に合わせて作成し、資質・能力の向上を目指していく。
- ・ 中学校区で定めた学びのインフラを研究2年目も徹底して取組を進める。
- ・ 確実にP D C Aの確認を行い、短いスパンで回していく。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

【成果】

- ・ 学年毎に、生活科・総合的な学習の時間を軸として資質・能力ベースで各教科の学びをつないだカリキュラム・マップを作成することができた。
- ・ カリキュラム・マップで示した年間計画を月ごとに記した計画表を作成し、その中に、「言語能力」「情報活用能力」「問題発見・解決能力」との関連を記し、教師が意識して授業実践していった。また、実践後教師は記録を残し、児童にはアンケートをとり、教科横断的な学びの良さを児童と共に実感していった。
- ・ 各教室において、カリキュラム・マップを「見える化」することで、児童にも「意識化」させ、児童と共にカリキュラム・マップに教科横断的な学びの足跡を残すことで、より「学びをつなぐ」大切さを意識して学習するようになった。
- ・ 算数科の授業における学習の基盤となる資質・能力の捉えをまとめたことで、1時間の授業の流れの中で、資質・能力を意識した授業改善を行うことができるようになってきた。
- ・ 中学校区で定めた学びのインフラである「向島スタンダード」や「振り返りの視点」に継続して取り組む事で、「言語能力」「情報活用能力」「問題発見・解決能力」の力が伸びてきた。
- ・ 1年目の課題として、より短いP D C Aの着実なサイクルが、子供たちに力をつけていくことを全教職員で確認し、2年目は、C Aの見取りを確実にを行い、短いサイクルで回すことができるようになってきた。若い教職員が増加する中、担任任せにするのではなく、組織的な対応となるよう、異学年交流を仕組み、教師も子供もベ

テラン教職員や上級生から学ぶ場を設定することで校内での取り組みに統一感がでた。

【課題】

- ・「よりよいものを求める」質の高いPDCAとなるようにする。
- ・ルーブリック評価の活用が十分ではない。
- ・算数科を中心とし、学習の流れの中で学習の基盤となる資質・能力を意識したタブレットの活用が求められる。

【改善策】

- ・月ごとのカリキュラムの見直しが、さらに次の単元構成や授業の質の高まりにつながるよう、「見取り」から「改善」についてより質の高い見直しを図っていく。
- ・ルーブリック評価を児童におろす場を今一度年度当初に確認し、実践化へとつなぐ。
- ・算数科を中心とし、学習の流れの中で学習の基盤となる資質・能力を意識したタブレットを活用した授業改善にさらに取り組んでいく必要がある。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
5月	第1回カリキュラム・マネジメント推進委員会(今年度の研究の概要及び計画、総合的な学習の時間の小中全体計画を作成する) プログラミング教育研修
6月	カリキュラム・マネジメント検討会議(4校訪問) 校内研修(情報教育) ノート交流会
7月	第2回カリキュラム・マネジメント推進委員会 各校で1学期の取組の評価・分析・改善を行う。 ノート交流会
8月	カリキュラム・マネジメント検討会議(1学期の評価・分析・改善、「カリキュラム・マネジメントに係る手引き」作成に向けた計画等)を実施する。 第3回カリキュラム・マネジメント推進委員会(G Suiteを活用した授業の在り方、4校の連携方法について検討する。) チャレンジサポート講座 校内授業研究指導案検討(2・4・5・6年)
9月	校内授業研究 模擬授業(6年) 校内授業研究(6年) 校内授業指導案検討(1年) ノート交流会
10月	校内授業研究模擬授業(1・2・4・5年) ノート交流会
11月	第4回カリキュラム・マネジメント推進委員会(「カリキュラム・マネジメントに係る手引き」作成に向けた計画等) 校内授業研究(1・5年)

	ノート交流会
12月	各校で2学期の取組の評価・分析・改善を行う。 GIGA スクール構想に向けての研修（実践交流等） 校内授業研究（4年） ノート交流会
1月	第5回カリキュラム・マネジメント推進委員会（「カリキュラム・マネジメントに係る手引き」作成に向けた計画等） 校内授業研究 指導案検討 模擬授業（特支・3年） 校内授業研究（特支・3年） GIGA スクール構想に向けての研修（実践交流等） ノート交流会
2月	各校で取組の評価・分析・改善を行う。 第6回カリキュラム・マネジメント推進委員会（「カリキュラム・マネジメントに係る手引き」作成に向けた計画等） GIGA スクール構想に向けての研修（実践交流等） ノート交流会
3月	まとめ カリキュラム・マネジメントに係る手引き完成 委託事業完了報告書等の提出 GIGA スクール構想に向けての研修（実践交流等） 校内研修 研修のまとめ

3. 実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策 (○：成果、●：課題)

- 取組の評価方法や評価の時期を設定したことにより、評価や改善が進み、年度途中での改善や取組が充実した。
- 中学校区や各学校ごとに育てたい資質・能力を設定し、教育活動と関連させて取り組んだことにより、教育活動を充実させることができた。
- 中学校区で学習や生活の基盤を決めて取り組んだことにより、4校の教職員の指導のベクトルが揃い、児童生徒の成長につながった。
- 教科等横断的な視点で組み立てていくことや教育課程の評価、改善を図っていくこと、人的物的な体制を確保することを次年度以降に引き継いでいくことは難しい。そのため、調査研究が終わった後も、中学校区や校内でカリキュラム・マネジメントの核となる委員会を継続して実施していく。